



フィリピン企業はスプリング・ フィーバー

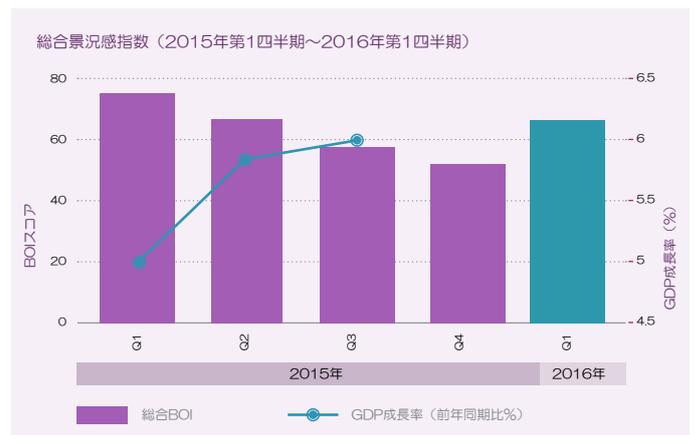
春に向けてフィリピン企業は上昇基調にある。景況感指数（BOI）は若干の下げを記録した第4四半期から立ち直り、2016年第1四半期は14ポイント増の66%となった。ダン・アンド・ブラッドストリートが調査対象としているすべての主要業種において、ASEAN地域で最高を記録した。回答者の70%近くが見通しを引き上げた一方、見通しを引き下げた回答者はわずか3%で、残りは横ばいと回答している。今四半期はすべての指標が前四半期比で堅調に上昇し、うち4指標は二桁増を記録した。

- 売上高は0.7ポイントの微増で81%、純利益は7ポイント増で80%となった。卸売、建設、サービスが上昇の波に乗っている。
- 販売価格は17ポイントの上昇となった。食品の値上がり率がインフレ率上昇の主な要因となっている。今年はまだ最も速いペースで消費者物価が上昇しており、インフレ圧力が徐々に高まっていることを示唆している。
- 今四半期の新規受注は16ポイント増の77%で、卸売とサービスが牽引している。在庫は23ポイントの大幅増となり、鉱業、卸売、製造で大きく増加している。
- 従業員数は50%の大台を初めて突破し、59%に達した。前四半期比では22ポイント増となり、ほぼすべてのセクターで上昇した。前年同期比では35ポイント増となっている。

その他2つの調査結果も上記の結果を裏付けている。中央銀行による第4四半期の消費者心理調査によれば、消費者の景況感は2013年第3四半期以降で最高の水準となった。主として失業率の低下と景気の回復が、景況感を下支えする2大要因となっている。一方

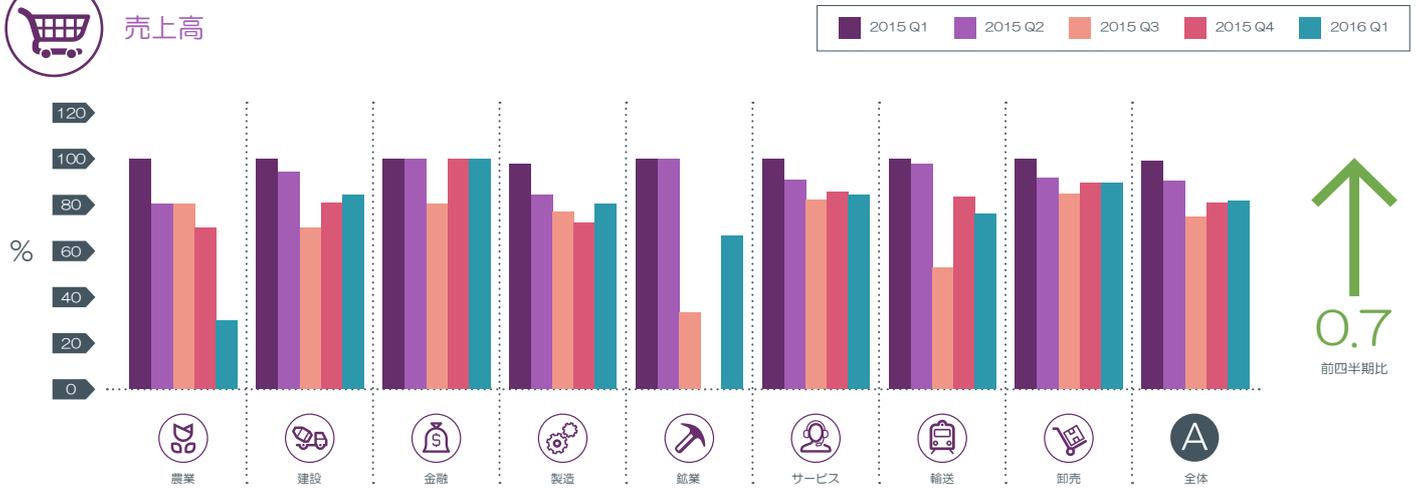
で、中央銀行による企業心理調査によれば、売上や受注の増加を含む数々の要因の下支えを受け、第4四半期の企業心理は過去2年で最高となった。卸売および小売セクターにおいて、景況感が最高を記録した。

フィリピンは引き続き、東南アジアで最も成長が速い国の1つとなっている。D&Bでは全体として、フィリピン経済に対して広く楽観的な見通しを維持しており、引き続き2015年の通年の成長率は5.8%を予想し、2016年については若干高い6.2%成長を見込んでいる。現ベニグノ・アキノ大統領の後継者に関する不透明感が、投資家心理を短期的に多少冷え込ませる可能性はあるものの、アキノ大統領退任後も事業環境の改善は続くと予想している。実際に、主要な候補者すべてが、大統領就任後のさらなる自由化促進の意思を示している。インフレ率は中央銀行が目標とする2~4%には届いていないが、金利は過去最低に近い水準にあり、経済が健全なペースで成長していることを考えれば、インフレ率が急速に高まったとしても中央銀行には金融引き締め余地が十分に残されている。





売上高



純利益

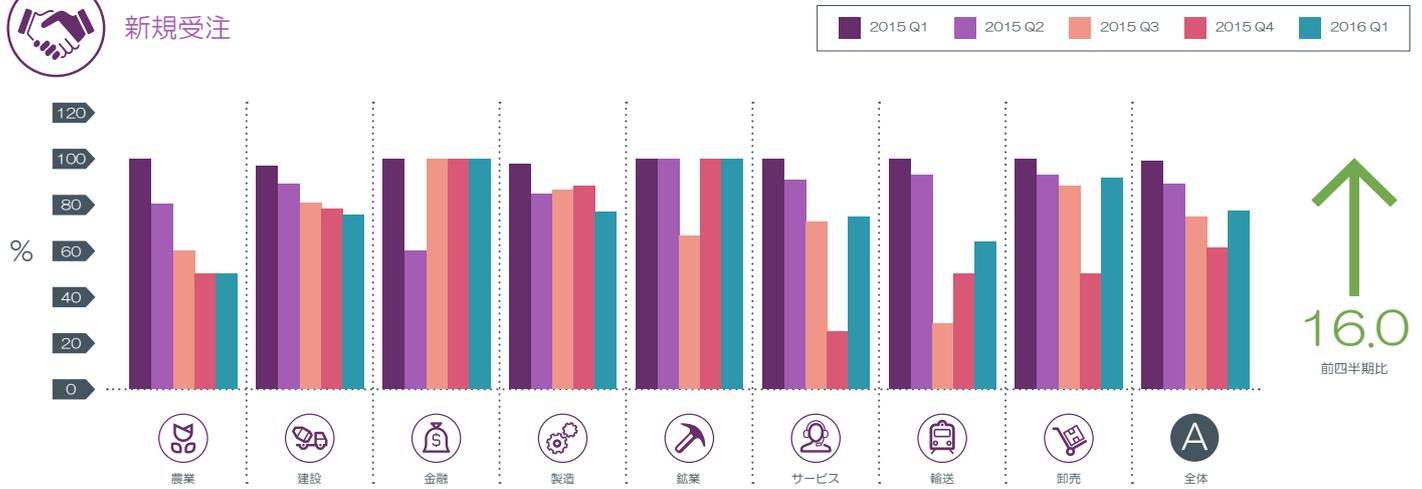


販売価格





新規受注



在庫



従業員数

